

2022-1-30

# ふじさわ・九条の会ニュース

No.67



発行人 ふじさわ・九条の会 事務局長 吉塚晴夫 090-7949-9854

HP (ホームページ) <http://hws2.spaaqs.ne.jp/fujisawa9jo/>



検索「ふじさわ・九条の会」でも開けます。

## いまそこにある危機—岸田政権の正体

(吉塚晴夫)

岸田政権の支持率は上昇している。コロナ対策で高評価になっているらしいが、日本人はどこまで騙されたら分かるのだろうか。アベスガが如何にでたらめで酷いことをやったか。この10年のことを忘れられるのか。それを継承する岸田政権を評価できるのか。

### コロナへの対応、赤木裁判

コロナ感染者は年末年始には顕著に減少した。その時に今日の第6波に何も備えをせず、いまも過去と同様に医療逼迫、飲食業への抑圧、学校行事の中止を再来している。コロナ禍が3年目になるのに病院、病床、保健所の削減、統合、廃止を進めているのはアベスガ路線そのままである。

赤木雅子さんが起こした裁判では、国は認諾という手法で、強引に裁判を終結させた。国民の税金を使ってアベスガの犯罪を隠ぺいするのである。

### 軍備増強と一層の対米従属へ

岸田政権はアベからの宿題として負わされた「敵基地攻撃能力の保有」を、迷いなく進めている。敵基地攻撃能力とは相手国殲滅能力に他ならない。相手国に対して戦争を仕掛けることを、政策として保有すると言っているのである。遂に日本は戦争を政策として、はっきりと検討する国になり果てたのである。

沖縄先島諸島では日米共同使用基地の建設、合同訓練を行っている。台湾有事、対中国戦の為だ。自衛隊の将官は言う「自衛隊に住民を保護する余裕はない。」軍隊は国民を守らない、これは先の戦争の全体を通して、そして何よりも沖縄戦の実態を通して証明されたことだ。岸田政権は戦中のように、再び沖縄を捨て石とすることを表明したのである。

オミクロンコロナの急激な蔓延は、沖縄や岩国

などの米軍基地から広がった。韓国、ドイツ、イタリア、フィリピンと比して、日米地位協定は防疫の面でも、米軍への従属が明瞭となった。

### 或る疑問

このような軍事推進の中で、恐らく意図的に日米ともに目を瞑っているであろう事実がある。日本の海岸線に置かれた56もの原発である。仮に戦端が開かれ福島以外に幾つかの原発を破壊されたら、日本は米軍基地と共に滅亡する。原発の存在とその防護（最も効果的な防護は即時の廃炉である。）、この致命的な弱点をどうするのか。

### 新しい資本主義

岸田は総裁選の時は「分配なくして成長なし」と掲げていたが、当選後は党内と経団連からの圧力で、早々に「成長なくして分配もない」と修正した。岸田の言う「新しい資本主義」とは、アベのトリクルダウンの焼き直しである。

年末の株価がバブル期以来、32年ぶりの高値となった。その一方で食料品配布に長蛇の列ができた、という二つの記事が新聞の一面に載っていた。貧富の格差は益々拡大している。世界では1%の富裕層が、世界の富の40%を占有している。「極度の不平等は経済的暴力である」(Oxfam)。そういう世界になってしまったのだ。

### 憲法改正は重要な政策

岸田政権は任期中の改憲を表明し、自公維新とも憲法審査会の毎週開催を呼号している。安部法制以来自衛隊の米軍との一体化の進展により、憲法9条はまさしく蹂躪されている。最も警戒すべきは「緊急事態条項」である。コロナ禍の今こそ緊急事態条項が必要だという、世論作りに政権は躍起となっている。これは最悪の憲法破壊条項である。私たちの長い活動の意義が問われている。

# 安保法制の違憲判決を勝ち取ろう

(島田 啓子)

## 憲法判断をしない不当な判決

不戦の誓いを高らかに掲げた憲法を持つこの国の姿を大きく変えてしまったのが新安保法制です。そもそも2014年に憲法違反とされてきた集団的自衛権行使容認が閣議決定され、それに基づいて多くの市民や憲法学者の反対を押し切って強行成立された新安保法制。

各地で起こされた違憲訴訟は全国で22地域25件に上りますが、21年12月現在16の地裁、3つの高裁で判決が出ています。しかしそのほとんどが19年11月の東京地裁の判決を踏襲し、「現に我が国が武力攻撃を受けていないから、原告らの生命・身体の危険はなく、その不安・恐怖なども法律上保護された利益とは言えない」と憲法判断を回避した不当な原告敗訴の判決が続いています。



地裁前を行進

## 神奈川では2021年12月9日に結審

神奈川では16年9月に横浜地裁に提訴し、翌年1月の第1回口頭弁論を皮切りにコロナ禍のため何回かの延期を経て21年12月9日に第14回口頭弁論・結審を迎えました。

昨年の夏から秋にかけて取り組まれた公正な判決を要請する横浜地裁宛の署名は、原告・サポーターの総数580名の50倍にあたる29,000筆という目標を大きく上回る73,761筆が集まり、12月9日の結審の日に提出しました。ふじさわ・九条の会のみなさまから返送された署名もそこに含まれています。判決は3月17日に言い渡される予定です

## 憲法の枠を超えてしまった自衛隊

新安保法制の制定は、改憲手続きによる明文改憲ではなく、政治によって憲法の制約を踏み越えるという実質改憲が行われてしまったも同然で

す。制定から6年、自衛隊の装備は攻撃的なものに様変わりすると同時に、米軍との共同訓練は我が国周辺をはるかに超える地域にまで及んでいます。また琉球弧といわれる南西諸島には自衛隊基地の設置も進められ、台湾有事の際には要塞としての役割を負わされることにもなりかねません。憲法九条を持つ国としては考えられない軍事大国に変貌しつつあるのが現状です。



報告集会 於波止場会館

## 司法の役割を果たして

司法・立法・行政の3権が分立していなければ立憲国家とは言えません。今政府も国会も様々な場面で数の力に任せて主権者たる国民の意見を無視して暴走しています。それに歯止めをかける最後の砦として私たちは司法に訴えているのです。

結審の日に意見陳述された伊藤真弁護士は「裁判所が憲法判断をあえて避けてしまったとしたら、一体誰が憲法秩序を回復し、立憲主義を健全な状態に戻すというのでしょうか。日本が戦争に巻き込まれて現実に死者が出てから、その遺族に裁判で争えとでもいうのでしょうか。」「本件で裁判所が明確な違憲判断を示すことは、司法が政治に巻き込まれるのではなく、司法の威信を取り戻し、立憲主義を回復するために、今、国民から最も司法権に期待されていることなのです。」と述べ、「裁判官各位の良心が凝縮されたような判決を書いていただけるものと信じています」という言葉で結ばれた陳述に傍聴者から大きな拍手が送られました。この陳述が裁判官の心に響かないはずがないと私たちは大きな期待をもって3月の判決を待っています。

※写真は安保法制違憲訴訟かながわの会 HP から

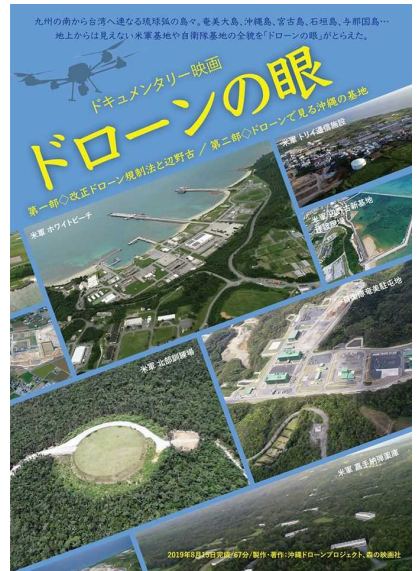


## 『沖縄ドローンプロジェクト・奥間政則さんを囲んで』

昨年11月、沖縄との関係が深いネパリ・バサーロの代表をされている土屋さんのご縁から、映画『ドローンの眼』の製作者の1人である奥間政則さんと連絡を取らせて頂く機会を得ました。そして今回、藤沢までお越し頂き、お話をお伺い出来ることとなりました。

一昨年ふじさわ九条の会主催の映画会『ドローンの眼』を拝見させて頂き、違法な土砂搬出を止めるため市民たちが小さなカヌーで巨大な船を阻止する姿や、市民が議員と共に防衛省の官僚を相手に違法性を追求するシーン、そして沖縄島周辺の島の島々も基地があり自然豊かな島々はまさに軍事列島と化している事実を知り、ショックを受けると共に、同じ日本に住んでいるが、テレビで報道されないということだけで、これだけ深刻なことを知らずにいたということに憤りとも後ろめたさとも言えない感情が湧いてきました。ですので今回、映画を製作されたご本人である奥間さんのお話をお伺い出来ることを大変嬉しく思いました。

勉強会は『国策に翻弄される南西諸島の島々(琉球弧)ドローンが暴く政府の不正』という主題のもと2つのテーマが扱われ、基地問題とハンセン病差別の歴史についてのお話をお伺いしました。両者に共通するのは国策による市民の圧迫でした。



ドローン禁止警告板の前で撮影(辺野古の浜)  
(奥間ホームページ)

ドローンを使って基地工事の進捗状況の把握や工事の不正、不備を監視し、映画『ドローンの眼』製作を行った『沖縄ドローンプロジェクト』において、土木技術者の立場から分析担当責任者をされている奥間さんは、映画の中で防衛省官僚にドローンの映像を突きつけて追求されていた方です。"聞いてくれる人が1人でもいるなら1日に何回でも、何時間でも話すよ。"と力強く仰る奥間さんは講演で全国を回られており、前日に東京で講演されて夜遅くに藤沢に移動されてきたにも関わらず、疲れも見せず笑顔で会場にいらして下さいました。

辺野古工事の問題点の一つである、大浦湾の工事海域海底が軟弱地盤であり水深30m、軟弱地盤層(ヘドロの様なものらしいです)60mにも及ぶ場所での工事(豆腐の上に五重塔を建てる様なもの?と勝手に想像しています)を行うために、豆腐を固くするための工事による環境破壊はとてつもないものになり、莫大な税金投入がなされるであろうことを語って下さいました。この工事を強行する理由は何か?との問いに対しては、"この難しい工事を行うことで世界初を達成できる" "工事は長引けば長引く程お金がかかって儲かる"という、地元沖縄の視点からは到底受け入れ難いことが想像されるとのことでした。多大な犠牲を払って建設したとしても、大浦湾には活断層があり危険な場所であるとのこと。さらに辺野古内陸にある辺野古弾薬庫には核兵器が持ち込まれた記録もあるとのこと、政府は市民の安全と自然の恵みを楽しむ権利をなんだと思っているのか疑問と怒りしか浮かびませんでした。また反対運動の中で、海の中に飛び込み反対を訴える人に向かって防衛省の船が突進してくることや、船をひっくり返して乗組員達が海に投げ出される映像もご紹介頂き、信じられず言葉が見つかりませんでした。法治国家というのは市民を守るためだけでなく、国を守るためのシステムであるのかという憤りが湧いてきました。

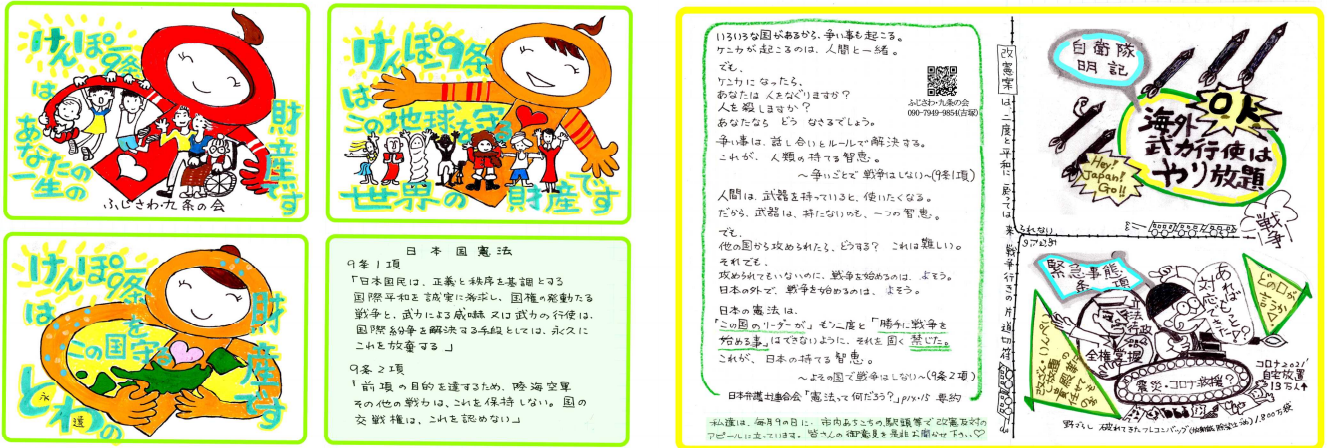
また、奥間さんはハンセン病の差別と歴史を訴える活動をされているとのこと。奥間さんのご両親がハンセン病を患っていた事から、患者隔離方針のためにハンセン病療養所の施設でご両親からも隔離されて育ったとのこと。 (らい予防法が廃止されたのは1996年) ご両親が回復され家族で沖縄に戻ったものの、長年に渡る隔離方針による国民意識の変革により、常に差別と偏見がついて回り、奥間さんのお父さんは仕事先で嫌がらせを受け幾度も仕事を失い、大変な苦勞をされたそうです。沖縄では先祖の絆が強いために差別も大きく、ハンセン病患者は亡くなくてもなお差別され続け、お墓にも入れてもらえないそうです。元ハンセン病患者のご子息であることを堂々と公言し、偏見と闘う道を選んだ奥間さんの言葉は力強く、強い意志と覚悟が会場の参加者全員に伝わりました。ここでも、『国策』によって、発症した本人だけでなく家族も苦しめ続け、修復できない傷を負わせ、人権や尊厳が奪われています。

最後に、"無関心は支持であり共犯である"という鎌田實さんの言葉を奥間さんは仰いました。さらに、自分も無関心だったから分かる、とも奥間さんは仰られていました。世論が社会を変えた例はたくさんあると話してくれた奥間さんから、私達は希望と決意を持ち帰ることができました。

(益永由紀)



# ストップ改憲！ カラフルチラシを作りました。



1月10日成人の日行動で「ストップ改憲 かわいいカラフルチラシ」が300枚飛び発ちました。改憲がいよいよ危うくなってきている中、世話人会で話し合い、若者達にも受け取ってもらえる工夫をして、新しいチラシを作ろうという事になりました。

下案を作り推敲・手直し、カラーコーディネイトの得意な人のアイデアで、明るく素敵な配色ができました。細部チェック、修正からレイアウト、印刷まで沢山の人の協力を得て、出来上がりました。



暮れ正月の忙しい中での連係プレーで、1月10日成人式行動での配布へとこぎつけることができませんでした。晴れ着の新成人の皆さんに声を掛け、しおり+チラシをセットで差し出すと、『一緒に?』『みんなで記念にもらっとく?』と仲良しらしい目配せで、うれしそうにチラシもスイスイ新成人の皆さんの手に渡って、各々のバッグやポケットの中に大切に収められていきましたよ。

通りかかった小学5~6年生位の子ども達にも声をかけました。『ワーツ、何これ?』と、笑顔で輪になって早速見入って下さって。で

もその時もう手元には3枚しかなく、渡せなくなってしまった子に謝ってから、「でも、もしかしたら向こうにあるかも。ちょっと待ってて」と、急いで本部テーブルに戻って見たら、数枚まだ残っていて、『ラッキー!』『でも先を急いで、行ってしまったかなあ』と走って戻ると、彼女達はチラシを輪にうれしそうにおしゃべりしながら、何と待っていてくれたのです。

アツという間の配布完了です。でも午後の分がない!そこで速攻自転車走らせマズプリへ。実に良きこのチームワークによる快挙でした。(M.S)



## 〈お知らせ〉

- ① **ふじさわ・九条の会の17周年の集い** 2022年5月7日(土)午後1時30分頃から  
藤沢市民会館小ホール、記念講演・講師高田健さん(戦争させない・9条壊すな!総がかり行動実行委員会共同代表)(内容未定)
- ② 成人の日行動で配布の新チラシを地域九条の会に順次発送します。